

「十字架の上と下で」

マタイによる福音書 27:32-56

2024年3月24日
野村 友美 師

<はじめに>

今週からいよいよ、イエス様の十字架での死を思い起こす受難週に入りました。受難週の初めの日である今日は、「棕櫚(しゅろ)の主日」と呼ばれる日曜日です。

イエス様が弟子たちと一緒にエルサレムの町に入られた時、人々は棕櫚、つまりナツメヤシの枝を手に持って、イエス様一行を歓迎したとヨハネによる福音書が伝えています。

この出来事を記念する日が、棕櫚の主日です。

ここからの1週間、教会はイエス様が十字架での死に向かって歩まれた一つ一つの出来事を思い起こしながら過ごします。

そして来週、イースターの朝には、ここで一緒にイエス様の復活を喜び祝うんです。

<十字架の上と下で>

さて、今日の聖書の箇所には、イエス様の十字架の周りにいる人々の姿が描かれています。

まずは、成り行きで十字架を運ぶ手伝いをする事になった、キレネ人のシモンという人物です。徹夜の裁判と処刑前のむち打ちで、傷ついて弱り切ったイエス様はそれでも決まりどおりに、

ご自分の十字架の横木を背負わされて刑場まで歩かされていました。十字架の縦の部分は、あらかじめ処刑場に立ててあったそうです。

横の部分だけとは言っても、大人の男性の体を打ちつけてぶら下げるためのものですから、相当しっかりした重たい材木だったはずです。

たぶん体力が尽きて動けなくなってしまったイエス様の代わりに、通りすがりのシモンが呼ばれて、しぶしぶ手伝わされたのでしょう。

次に登場するのは、イエス様の十字架刑を執行するローマの兵士たちです。処刑場のゴルゴタに着いたイエス様に、彼らは苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしていました。この苦いぶどう酒、まるで嫌がらせみたいですが、鎮痛作用がある没薬が入っていたんだろうと言われていました。十字架刑は、手足を釘で打ちつけられて長時間苦しむ残酷な刑です。だから見せしめとして効果があつたんですが、あんまりにも苦しいのでせめて少しでも痛みを軽くするために、こういう没薬入りのぶどう酒が差し入れられることもあつたんだそうです。

ですがイエス様は、十字架での苦痛をぜんぶ最後まで、ご自分で背負い切る決意を固めておられたのでしょう。ぶどう酒に込められた憐れみの気持ちは受け取って、なめただけで飲もうとはされませんでした。イエス様を十字架につけてしまうと、兵士たちはイエス様の服を分け合うためにくじを引き始めます。

鎮痛剤のぶどう酒を差し入れたかと思ったら、十字架で苦しんでる人の足元で、その服を楽しそうに取り合う。なんて無神経なことをするんだ、と思いますよね。確かにそうなんです、彼らにとってはごく当たり前のことだったんです。処刑を担当する兵士たちが、その死刑囚の服を分け合うのは、この嫌な仕事をさせられる代償、ささやかな特権とも呼べるものでした。

「かわいそうだけど」と思ったかどうかはわかりませんが、とにかく兵士たちにとっては、自分たちの当然の権利を楽しんでいただけなんです。

イエス様の頭上に掲げられた罪状書き「ユダヤ人の王」は、イエス様をローマに反乱を起こそうとした政治犯だ、と皮肉るための称号です。イエス様をローマの法律で死刑にしてもらうために、イスラエルの指導者たちが主張したこの嘘を、ローマ総督ピラトは訂正もしないでそのまま掲げさせました。

イエス様の両脇で、同じように十字架につけられた二人の強盗も、暴動を起こしてローマ人から略奪した人たちだろうと言われています。

イエス様は無罪だとわかっていたけど、ピラトは自分の立場を守るために、三人まとめて政治犯として処刑したんです。

十字架の周りには、処刑を見物に来た人たちが集まっていました。イエス様を捕まえて、死刑にすることに成功したイスラエルの指導者たちも、そこに混じっていました。神の子だった

ら、まず自分を助けてみろ！彼らは口々にそう言って、十字架の上のイエス様を嘲笑います。しまいには、一緒に十字架につけられている強盗たちまで同じことを言い始めました。本当に神の子なんだったら、私たちに証明してみせろ。そうすれば、信じてやろう。

この人々の叫びは、「何が正しいかは私たちが判断する」という主張です。こういう結果を出したら、こういうことをして見せたら、お前が正しいと認めてやろう。そんな風に、彼らは自分で自分を裁判官に任命して、「さあ、私を納得させてみせろ」と、被告人のイエス様に要求しているんです。

だから十字架の上のイエス様の叫びも、彼らは聞きたいように聞いてそれぞれ好きなように判断しています。憐れんだり、あざ笑ったり、無神経に自分勝手にふるまったり、好きなように人を裁いたり。十字架の下で繰り広げられる人間模様を見つめながら、十字架の上のイエス様は叫ばれました。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか！」

心をえぐられるようなこのイエス様の叫びは、まさに今この時も私たちの世界のあちこちから聞こえる叫び声ではないでしょうか。

戦争で、災害で、病気や飢餓で、理不尽な暴力で、多くの人々が傷ついて、仕事や生活の場を破壊されて、尊厳を無視されて、命を奪われています。平和だと思える国で、特別な不自由もなく暮ら

していたって、生きている限り、悩みやしんどさを抱えていない人は誰もいません。

有名人だろうと無名の人だろうと、信仰があろうとなかろうと、事件や事故や病気は、おかまいなしに襲いかかるでしょう。苦難に出会った時、私たち人間はそれぞれ、いろんな反応を見せます。不安に耐えきれなくて、根拠のない情報にしがみつこうとしたり。あの国が悪い、あの人のやり方が悪い、と誰かに責任を背負わせて鬱憤を晴らしてみたり。自分を守るために、人を思いやる気持ちを簡単に投げ捨ててしまったり。もちろん、そんな反応ばかりじゃありません。それぞれが背負っている務めや、湧き上がる憐れみに突き動かされて他の人を助けている方たちの姿もあちこちにあります。

どちらも、私たち人間のごく自然な姿だと言っていいでしょう。お互いを助けたい、愛したいと願い求めながら、それでも自分たちの知恵や力の限界に、私たちは否応なく向き合あわされます。自分の、他人の、どうしようもない弱さと限界に、絶望する時があります。自分たちの常識とか価値観では計り知れない、そんな神様を受け入れきれなくて、自分好みの何かや誰かを、神様の場所に据えようとしています。

私たち一人一人に命を与えて生かしておられる神様に、正面から向き合えない。私たち一人一人を愛しておられる神様を、信じきれない。私たち一人一人を知り尽くしておられる神様に、

頼って任せられない。そんな私たちの罪がもたらす孤独と絶望を一身に背負って、イエス様は十字架の上で叫ばれたんです。

神様、あなたはどこにおられるんですか？

いったい何をしておられるんですか？

私たちをお見捨てになったのですか？と。

<十字架から世界は変わった>

イエス様が大声で叫んで息を引き取られたとき、世界は変わりました。神様と選ばれた聖職者だけの場所にかけていた神殿の垂れ幕が、上から下まで完全に真っ二つに裂けました。神様と人々を隔てて遠ざけていた仕切りが、神様の力で取り払われたんです。そして、揺るがないはずの大地が震えて、硬いはずの岩が割れて、神様に従って死んだ人たちの体が生き返った、とマタイの福音書は不思議な光景を描いています。それがどういう形で起こって、どんな風に落ち着いたのか、書かれている以上のことは誰にもわかりません。何にしても、とにかく私たちの常識とか価値観とか日常の感覚が丸ごと引っくり返されたんだということを、マタイの福音書は伝えようとしているんです。

イエス様の死が、十字架の下に満ちていたあらゆることを引っくり返しました。

神様と私たちを隔てる仕切りは取り払われて、誰もが神様と向き合うことを許されました。私たちの思考を縛る常識も、私たち好みの価値

観も丸ごと引っくり返されて、ただ神様の力が、目の前に突きつけられました。

自分たちには関係ない、ユダヤ人たちの神様だろう、と他人事だったはずのローマの百人隊長と兵士たちもまた、引っくり返されます。

目の前で起こった出来事に、彼らは恐れおののいて、神様に向き合って、「本当に、この人は神の子だった」とイエス様のことを証言しました。2000年以上前、中東の小さな国の処刑場で、神様は確かに世界をひっくり返されたんです。神様のひとり子が掛けられた十字架を中心点にして、この時私たちの世界は変えられたんです。

見えている光景は、何も変わっていないかもしれませんが。相変わらず理不尽な世の中で、私たちは不安に振り回されて、神様に向き合えない罪を手放せずにあります。どうしようもない弱さと限界を抱えて、孤独と絶望に呻いています。でも、私たちの叫びはもうイエス様が十字架の上から声をふりしぼって、神様に向かって叫んでくださいました。その叫びに答えて、神様は世界を変えられました。

十字架の下からイエス様を見上げる時、私たちの居る場所は、もう神様の力があらわされている場所です。聖書が伝える十字架の上の叫びを聞く時、私たちはもう、神様の思いと力が働く場所に立たされています。

イエス様の復活を照らす朝の光は、もう私たちの世界に射し込んでいるんです。神の国は十字

架の下で、私たちの間で、もう始まっています。まだまだ暗くて、前に進んでるのかもよくわからない、果てしなく感じる道のりかもしれません。

それでも確かに、イエス様の十字架での死によって、神様はこの世界を引っくり返されたんです。限られた人たちだけが神様を知る世界から、すべての人が命の主である神様に向き合っ、て、神様を信じて頼ることを許された世界へ。私たちの力や価値観で動く場所から、神様の愛と力がすべてを動かす場所へ。

私たちの国から神様の国へ、この世界はもう引っくり返されているんです。

だからイエス様の十字架を見上げて、神様の愛と力に信頼して、神様が起こされる出来事に期待しながら、私たちは進み続けましょう。

神様のひとり子の命は、私たちすべての人のために差し出されました。イエス様の叫びは、私たちすべての人の孤独と絶望を身代わりに背負った叫びです。だから自分が、そして他の誰もが、神様に愛されてイエス様に背負われていることを認めて、大切に合っ、て、いたわり合っ、て、神様の国の光を掲げ続けましょう。

神様の栄光がすべての人を、すべての場所を照らす、朝を待ちながら。

お祈りいたします。